

情報新秩序とアシッド・キヤビタリズム

始めに

九二年十二月二十日に行われた国際連帯集会で、アジア学生連盟（A S A）のスティーブン・ガンさんが、帝国主義の今日的支配－抑圧形態として、「経済帝国主義」「情報帝国主義」ということを定義していた。

なるほど、新植民地主義的な第三世界への侵略など多様化、分散化を深めている現在的な帝国主義の政策を、軍事－外交という枠組みで捉えることがもはやできないことは、今日では自明の理であろう。

加えて、いわゆるポスト冷戦と呼ばれる、八九事態以降の南北問題の顕在化をも射程にいたしたトータルな帝国主義との対決が問われていることも、例えば第三世界の「モノ・カルチャ－化」を強要するI M F——世銀の構造調整政策の暴露などを通じて、次第に明らかになりつつある。

そこで本稿で私が課題にしたいことは、帝国主義の新植民地主義的な第三世界に対する抑圧や搾取が、資本主義的生産様式における根本的矛盾であるにもかかわらず、これを隠蔽する。なおかつそれを欺瞞的国際貢献

などの美名によって、粉飾していく、ブルジョアジーのメディア・コントロールとでもいべき、ガンさんの言葉を借りれば「情報帝国主義」との積極的な対決である。

一、ネットワーキングとしての情報新秩序とは

「湾岸戦争を想起すれば、情報の統制ないし不正な操作を通じたキャンペーンが、多国籍軍に政治・軍事両面の支持を集めるためにいかに役立てられたがわかる。」(『ASAニュース』C・W・HANG『MSAP』25号)マスメディアの今日的発展は、瞬時のうちに世界のあらゆる情報が、テレビという媒体をつうじて無自覚的にわれわれのもとにおりこまれることにあるといえる。言い換えればそれは、送り手の情報は受け手の意識に關係なく情報を氾濫させるのであり、受け手の側は意識するとしないとに関わらず、この情報を受け入れてしまう。

CNNの湾岸戦争の報道がそうであつたように、多国籍軍（それはとりもなおさずアメリカ軍であるが）の発表が、そのままテレビを通じてダイレクトに全世界に送り込まれ、「悪の頭目フセインを叩く正義の戦争」とか「ハイテク兵器によるきれいな戦争」などといったことが何度もキャンペーンされ、それが「LIVE」というリアルタイムの臨場感と相乗されることにおいて、あたかもそれが真実のように共同主観化される。

当時、原油にまみれて飛べない海鳥が象徴したように、それはメディアを通じた情報操作であり、当時、米

大統領だったブッシュが戦勝後の会見で明らかにしていったように、冷戦後の世界において「力の真空状態」を放置することによって、地域覇権主義に陥ってしまわないよう、「アメリカは新しい世界秩序」を守らなければならぬ。という主張に沿って、原油を海にまき散らしたフセインは悪で、多国籍軍の主力のアメリカは正義であるという論理を演出したというわけである。

このように俗的に言えば、例えば「サブリミナル効果」——いまではオウム事件などですっかりお馴染みになってしまったが、人間の潜在意識に働きかけて行動を誘発する広告効果で、砂漠の風景の映像のなかにワンションだけコーラの映像が入るとそれを見た人は実際には見えていないのにコーラが欲しくなるといった類である——と呼ばれるような「マインド・コントロール」としてのマスメディアと、人間心理というきわめて心理学的な問題意識にも成りがちであるが、ここで押さえておかねばならないことは、ハイテク産業の飛躍的な進歩をその前提としたところの、重層的にはりめぐらされたシステムとしての情報「新秩序」(『世界』臨時増刊「ジャーナリズムはなにを伝えたか」P3)が、現体制のイデオロギー装置として機能しているということである。

例えばユネスコが一九九一年に発表した『世界のコミュニケーションに関する報告』によると、「何にも増してマスメディアの経済的基盤を変化させた要因は、マスメディア企業と他の情報産業分野との結合である。この結合は、大企業とコングロマリットと多国籍企業をまきこむ、合理化と集中化の過程で進展した。」としている。コカイン密輸容疑で逮捕された、角川書店の社長、角川春樹は、「メディア・ミックス」という、テレビメディアを利用した独自の経営戦略を駆使していたというが、メディア自身も大独占のブルジョアジーの下で「情報経済」として統合されていくことになるというのがこのユネスコの報告である。

これは米・日・ECで世界の国内総生産の七〇%を占めている状況のなかで、「情報分野におけるハードとサービスでは、三者で九〇%近くを占める」(同報告より)という、ほぼ独占的な体制であり、具体的に見てみ

るならば、情報とコミュニケーション分野の世界のトップ企業三百社のうち百四十四がアメリカ、八十が西欧、四十九が日本であり、メディア企業のトップ七十五社のうちでは、三十九がアメリカ、二十五が西欧、八が日本の企業という具合に、いかに「先進国」主導の「情報一極支配」が形成されているのかがわかる。

ここまで見ただけでもあきらかなように、マスメディアの発信源は北の「先進国」であり、あたかも普遍性をもつて伝えられる情報が、実は北側諸国にとってのみ都合のよい情報であることも理解できることになる。「アジアだとたいてい、メディアは政府によって統制されているから、帝国主義の支配はどちらかというと間接的だ。たとえば新聞の国際面を見ると、そこに載っている記事のほとんどはUPIとかAPとかロイターとか二つか三つの通信社が書いたものというわけさ。」(『MSAP』26号) とステイブン・ガンさんがいうのも、帝国主義による情報の「私所有」にもとづく「情報一極支配」の構造にその根拠が求められるのである。

一般的にマスメディアの理念というのは、「眞実をありのままに」伝える情報の伝達に求められるものであるが、それは不斷にイデオロギー的な偏向を伴い、客観的事実との差異を区別するのは、実はほぼ不可能でさえあるといわれる。つまり存在している既存の経済社会体制の中で、唯一の形態であり支配的なウクライードであるところの資本主義社会の埒内での「事実」がそこで評価基準になるのだ。

そして、そこでの「市場経済」「自由流通」というドグマが「一般意思」としてわれわれのなかで共同主觀化されることになり、その意味では、世界中のあらゆる経済が、そしてあらゆる地球上の人民が、IMFの用語でいうところの「調整」を強要され、「適応」を余儀なくされるのである。

私は改めて偏向した情報ではなく、民衆に開かれたメディアを創造していく必要性を強く感じる。そしてそのためにはわれわれが今なにをなすべきなのかを次に考えてみたい。

一、「アシッド・キャピタリズム」の批判的検討

世界的規模でネットワーキングされた「情報帝国主義」の形態を指して、小倉利丸氏は人民の社会への統合が、大衆消費社会のように、物を媒介として実現する社会から、メディアによる文化的な「アウラ」（神秘的な雰囲気、オーラ）の生産によって直接人々の感性や、意識に働きかける社会へと転換されたと主張している。そしてこの意識の構造を「アシッド・キャピタリズム」と表現する。（小倉利丸著『アシッド・キャピタリズム』以下ことわりのない場合すべて引用はこの本による）

この著者の小倉氏はこの本の後書きのなかで、この著書が「まぎれもない、現代資本主義社会に対する批判を意図して書かれた」（p313）旨を主張している。そして「マルクス主義や左翼の言説や分析対象としては（今まで）ほとんど無視されてきた領域」を取り扱つたとしており、「これが今後必要不可欠になるマルクス主義のための課題の一つであるということをあえて強調しておきたい。」というのだが、一読して私は、そのような彼の思い入れとは裏腹に、立論の内容については到底マルクス主義的な考察にはなっていないと感じた。

なぜなら資本主義的「市場」が終焉し、「パラマーケット」というあらたなカテゴリーがそれを補完するといった小倉氏の主張する論理は、資本主義の評価として、どう見ても的外れな評価としか思えないからだ。

ともあれ、システム化された「情報帝国主義」の送り手の側の新秩序の形成にたいして、受け手の側のフアクターがあつて、始めてシステム全体が機能するという小倉氏の主張は、それなりに妥当性があると思えるし、「今後必要不可欠なマルクス主義的課題である」という小倉氏の思いに免じて、ここで取り上げてみたい。

「文化についての理解には、二つの典型的な捉え方がある。すなわち、社会の全体構造から理解する方法と、個別の文化的な対象や個人の感性・意識から理解する方法の二つである。」(P8)と小倉氏はいい、その前者がオーソドックスなマルクス主義の「土台―上部構造」論に照応するとしている。そしてこの理解においては「文化的諸関係は上部構造に分類されて土台の経済諸関係から切り離され、経済の文化に対する決定関係を優先させてきた。」という。

いうまでもなくスターリン主義の「弁証法的唯物論」理解にもとづく経済決定論的陥穽を指していると思われるが、小倉氏はこの後の論調にも明らかのように、「土台―上部構造」そのものの否定をも意図している。曰く「他方、もう一つの理解として、ベンヤミンやボーデリヤールのような批判的文化論や芸術論の側からは、人々が最終的に受け取る物のイメージが人々の価値観やイデオロギーにどのように関わるのかが主要な関心であつた。そうすることによって、個々の消費対象に内在してそのモノのもつイメージ生産機能を解きあかすことに成功した多くの例を生み出してきた。」と個別性から問題を捉える「批判的文化論」を「資本」の制約を受けない範囲で評価しつつ、この二つの文化に対する理解の仕方に根本的に共通する問題点として「パラマーケット」という構造の「軽視」を指摘するのである。

ここでいう「パラマーケット」とはなにかというと、多くの文化的な諸現象が、商品経済の市場システムとは相対的に分離されつつ、資本の価値増殖に接合されている特異な生産と消費の構造であるという。つまり彼は、資本主義的生産様式とは相対的に別個の存在としてありながら、影響を受け、与え合う存在として、この「パラ・マーケット」なるものを概念規定しているのである。

もとよりわれわれは、スターリン主義的な経済決定論を否定するし、「(既存の)社会主義の政治は、文化をステレオタイプの道具としてしか遇しなかつたために、道具としては錆びつき、役たたずになってしまい、欧米の

「大衆文化」にあっけなく敗北した。」という小倉氏の主張はその意味で正しいと思う。しかしその根拠とするものが、取つて付けただけの「パラマーケット」という概念でしかなく、結局彼が言いたいのは、「文化」の市民社会的自立化でしかない（そのことについて彼は否定しているが）のである。

マルクスはその著書『ドイツ・イデオロギー』のなかで「支配者の思想は、いつの時代にも支配的思想である。」（合同新書版『ドイツ・イデオロギー』、P95）と規定している。マルクスは支配階級であるブルジョアジーが人民支配の環としてイデオロギー的な統合を採用するというのである。

十九世紀の産業革命以降、大工業の成立と資本家の商品経済の完成は、一方における私的所有の独占と、他方における差別、抑圧構造を現出させる。しかしそれは先行する封建時代や、奴隸制時代における直接的な搾取を意味するものではなく、より巧妙化された支配形態である。

これは物質的生産諸関係の総体である下部構造を、精神的生活過程である上部構造が補う関係にはいることを意味する。つまりブルジョアジーは観念的でありかつ実践的な表現―共同幻想としての国家形態のうちに自らの支配を貫徹するのだ。

ここで言うところに支配的な思想の内実は、支配的な物質的諸関係の観念的表現、すなわち思想として表現されるところの支配―被支配という図式での諸関係であり、人民に対する共同幻想としての、イデオロギーの存在を明らかにしながら、階級社会における支配者階級、つまり物質的生産の手段を自らの指揮下に置く階級による、被支配者階級に対する強制であることがマルクスによって明らかにされる。

当然ながら、われわれ人民は自らの物質的生産の手段をもちえない限り、ブルジョアジーに支配され続ける訳である。

小倉氏が立論の根拠としている「パラマーケット」における「土台」は、ブルジョアジーによって占有されて

いる訳だが、これを物質的生産諸関係の総体としては捉えずに、「」の新たな「土台」がコミュニケーション、情報、知識などと呼ばれる領域である。」(P303)と捉えてしまうところに小倉氏の最大の陥穰があるのだ。

例えばマルクスは「このような諸変革（社会変革）の考察にあたっては、経済的諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それを闘いぬく場面である法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならない。」(『経済学批判』P16)と言い、両者の概念上の明確な区別を主張している。

また廣松涉氏は、「人間存在の汎通的・基底的な在り方、すなわち、生産という協同的対象的活動の有機的な函数的・機能的機関、これを共時論的に概念化したものが生産諸関係の総体であり、マルクスによれば、このようなものとしての生産諸関係の総体が「社会の経済構造」「実在的な土台」をなし、これを基盤にして「上部構造」が存在する」(廣松涉著『唯物史観と国家論』P160)と言い、下部構造＝土台は共時論的な概念であると規定付けている。

つまり資本家的な生産様式内における共時論的なヒューポダイムー共同主觀性としては、「土台」＝下部構造は物質的生産諸関係の総体としての生産手段の私的所有に求められ、それを占有しているブルジョアジーは、ゆえに人民に対するイデオロギー的な支配をも貫徹できるのだということになる。

結局小倉氏の陥穰は、そのような共時論的なヒューポダイムとしての資本主義的共同主觀性の欠如に求められると思うが、問題はそのような認識の問題のみに止まらない。

ここでは読み込み不足の為、感想しか述べられないが、彼の主体的立脚点に関して、「アシッド・キャピタリズム」によって「ジャンキー」に追いやられた人々の、未来に向けたオルタナティブの客觀性について指摘しておきたい。

「かつての剩余労働の搾取が物質的な富の搾取とむすびついていたとすれば、アシッド・キャピタリズムでは、意味の搾取はもはや物の領域を越えている。…それは私たちの慢性的な欲求不満が資本によって巧妙に形成されたものであるということを見抜くことでもある。しかしそのことは同時に、安易な禁欲主義を提起するということではない。そうではなくて、私たちは、資本の提供するドラッグには飽き足らない自立したジャンキーになることが必要なのだ。」「労働の罠を仕掛けられて限られた時間と空間の中に快樂を捜し求めたり、お膳立てされた観光旅行によって都市の表層をなぞる疑似的なノマドを気取るのではなく、私たちが自己決定権を握ることが必要なのである。」(P310) 少し引用が長くなってしまったが、小倉氏の「アシッド・キャピタリズム」に対するオルタナティブは以上のようなものである。

断言になってしまふことを恐れずに言うと、このような結論では、ニーチェが「能動的ニヒリズム」と表現したような、人民が皆、対自的な存在になることで事足りりとしており、現存支配体制としての資本主義に対するトータルな批判にはなっていないのではないかと思う。こういった傾向はポスト・モダンの思想家にも共通する問題でもあるが、社会の諸矛盾に対して、それを実践的に攻撃して、変革をめざすことに何ら繋がらない。

カントではないが、タブラ・ラサに文字を書き込むように人民を啓蒙して、自立をよびかけるのみである。そしてそれは結局、構造主義が「逃走論」に行き着いたが如く、常に現状肯定に終始することは明らかである。小倉氏の意図はどうであれ、それが客観的でネガティブな情勢把握に止まっているかぎり、現実の世界はなにも変わりはしないのだ。

— 結語として —

以上この『アシッド・キャピタリズム』の検討を通じて確認できることは、一方でのシステム化、ネットワー
キングされたマスメディアの氾濫のなかで、送り手と受け手の相互関係が「情報帝國主義」として機能しうるもの
であること。そしてその場合、送り手＝ブルジョアジーはあくまでも物質的生産手段の護持を至上命題としつ
つ、イデオロギー操作によって、われわれ人民に対し慢性的な欲求不満＝ジャンキーを強要するものであるとい
うこと。そしてそういった状態からの脱却は、決して「自立したジャンキー」になることによって解決する訳で
はなく、ブルジョア社会のラディカルな批判と実践によってのみ切り開かれるものだということである。

先日新聞に、「世紀末通信」というテーマで言語学者のジュリア・クリステヴァのインタビューが載っていた。
彼女は「遺伝子工学や臓器移植に見られるように、科学は人間の身体的な同一性を失わせる」とい、その一
方で「メディアによるイメージは、人間の想像力を殺してしまう」と身一心における「人間の同一性」に対す
る抑圧を問題にしていて、私はほんとにその通りだと思った。

われわれも主要な情報源としてマスメディアを利用しておらず、ブルジョアジーの意図するイデオロギー的な情
報の氾濫に日々さらされている。その意味ではクリステヴァの言うように人間の同一性の疎外を受けているのだ。
そしてそのような状況のなかでは、小倉氏の言うように常に批判的、対目的な視点を持つことは重要である。
しかしそれがオルタナティブたりうるには、積極的な社会へのアンガージュこそが必要であり、そこでブルジョ
アジーとの不斷なる対決をつうじて、人間の同一性の回復——それは現実社会においては、物質的生産手段の

労働者の所有の実現にほかならないが——がなによりも求められなければならないのだと思つ。

(1992.12)

